

さまようフィジー人

—相互扶助組織に現れる諸実践の文化的背景と近代的正統性の模索—

高 橋 玲[†]

概 要

別稿で検証した経済人類学の新たな枠組で実際の事例を分析することが本稿の課題である。途上国の近代化は、途上国の人びとが資本主義のハビトゥスを体得する過程として理解される。筆者は、フィジーの二つの村でフィールドワークを行った。そこでの伝統的な社会生活、中でも相互扶助の組織化には、市場原理の浸透による偏倚的实践の諸相が見られた。社会環境の変化にうまく順化できる者やできない者がおり、彼らの諸実践の相互作用によって、新たな正統性が再生産されつつある現状を明らかにする。

目次

概要	1
はじめに	2
1. フィジーの経済生活と相互扶助	3
2. 事例	7
3. 考察－偏倚の諸相	12
おわりに	18
参考文献	19

[†]大阪産業大学 経済学部 非常勤講師

草稿提出日 8月5日

最終原稿提出日 12月27日

はじめに

筆者は別稿¹⁾にて、R. ファース、J.A. シュムペーター、C. ギアツ、及びP. ブルデューの視座を、経済人類学の新たな地平に位置づける理論的作業を行った。

ブルデューは、過去の経験とその反省で構成される価値の体系が、心的構造として身体化されたものを「ハビトゥス (habitus)」と呼んだ。個々人のハビトゥスには、ある局面における「妥当な選択」を表象する「場の正統性」が構造化されているが、他方、それぞれの性向や経験を反映させたハビトゥスは個々人のあいだで異なる。結果として、ある「場」に現出する個々人の行為の形式には「偏倚的实践」の相が見られることになる²⁾。ティコピア社会という具体的な「場」に、個々人の諸行為間の「偏倚」が生じうる可能性を指摘したファースの論点は、ブルデューの知見を拓く端緒であった。また、「場の正統性」からの偏倚を含む行為がいかにして生ずるのかという点に関して、「行為者の力能」という主体的条件を導く議論を展開したシュムペーターと、「偏倚的实践を産出する文化資本」という客体的条件を導く議論を展開したギアツの所論は、ブルデューの諸概念を参照した新たな経済人類学の基層となっている。

グローバル化が進む今日、地域社会に浸透する市場原理に対して、それぞれの地域社会の経済主体はどのような対応を見せるのか。本稿の目的は、新たな経済人類学の理論的枠組みに立脚しながら、それぞれの具体的様相をミクロの次元で叙述することである。押し寄せる近代的市場システムと、資本主義の世界が要請する様々な価値の体系に相対しながら、彼らは新たな社会経済的環境に自らを順化させようともがき、「資本主義のハビトゥス」に整合する妥当な行為を求めて「さまよって」いる。その様相の具体的描出こそが、経済人類学の実証的側面を補完するものになる。

そこで本稿では、具体的事例としてフィジーのW村とNS村を取り上げ、経済人類学の分析枠組を用いて考察する。近代化と伝統との相克の中で、フィジーの相互扶助組織には、偏倚的实践の諸相と、それに伴う正統性の変革が見られた。それらの具体的ありようを見ることで、新たな経済人類学の方向性を示すことにしたい。

1) [高橋2016c] を参照。

2) 「ハビトゥス」、「場 (champ)」などの諸概念については、[高橋2016c] を参照。特に、「場の正統性」と「偏倚的实践」に関しては、ブルデューの枠組みに立脚しつつ筆者が独自に設定した概念である。

1. フィジーの経済生活と相互扶助

フィジーの村落社会は近代的市場システムに巻き込まれ、貨幣交換や利潤目的の商売などの形式が村内に入り込みつつある。それは例えば、給与所得者として都市で働いたり、都市のマーケットにタロイモやキャッサバを売りに行ったり、あるいは都市の学校で教育を受けたりという個々人の経験が彼らのハビトゥスに追補された結果として、現出した実践であると捉えられる。都市と村とでは、まったく異なる規準が横たわっている。結果として正統的な実践形式がそれぞれ異なることも、彼らは十分に認識している。彼らは、村では村の正統性にしたいが、都市では都市の正統性にしがって判断を行い、妥当な実践形式を選択しようとしている。ただしそこには、正統性の判断が容易な状況も、そうでない状況もある。中には、解釈を誤ったり、判断がおぼつかなかったり、あるいは、あえて正統性から逸れた選択を行う者もいるだろう。まさにそこには、偏倚の実践の様々な相が現れていると考えられる。

筆者は2002年3月から約一年半、フィジーの二つの村で現地調査をした。W村とNS村である。

W村は、ナイタシリ県にあるビチレブ島内陸部の農村である。戸数は28、人口は約200人である。村人はほとんどが農業で生計を立てている。首都のスバからおよそ40kmの未舗装道路を走り、乗用車なら二時間、乗り合いバスなら四時間で到達する。村の傍をレワ川の支流ワイニマラ川が流れる。ナイタシリ県は、その土地のほとんどがビチレブ島内陸部にあり、人びとは比較的、伝統的な慣習を守って生活しているとされる。W村に電気は通っていない。プロパンガスを使用する家もあるが、多くは薪を燃やして調理を行う。

NS村は、スバからバスとボートで一時間半ほどの、レワ県沿岸部にある漁村である。戸数は22、人口は約100人である。生業は海での漁業のほか、スバに通勤する給与所得者もいる。レワ県は、伝統的に、フィジーの中でも高い地位を保持してきた地域である。NS村は昔から、儀礼において焼き物を焼くという伝統的役割を担ってきた。NS村には電気が通っており、村人は多様な消費財に囲まれて生活をしている。プロパンガスを使用する家も、W村よりはるかに多い。

フィジーには、共同体的な紐帯に基づいた相互扶助の社会組織がある。例えば伝統的な社会組織における財の流通は、互酬的な交換として行われる。異人が村に入る際にはセヴセヴ (*sevusevu*)³⁾ という儀礼を行わねばならない。これは、ホストからゲストへ、あるいは

3) セヴセヴに関しては、[高橋2008: 153-154] で詳述している。

はゲストからホストへの、ヤンゴーナ (*yaqona*)⁴⁾ の儀礼的贈答であり、それによって互いの互いに対する認識と受容とが正式に承認されるものである。伝統的規範の残る W 村だけでなく、近代化が進む NS 村においてでさえも、セヴセヴと、それに伴うヤンゴーナの共飲儀礼は重要性を保っている。

現実の村落生活では、「場の正統性」を共有しない異人がゲストとして加わることがある。ある「場」における社会生活の局面においては、全ての参加者が同じ正統性を共有することが必要とされる。そのためには社会組織の文脈における、異人の他者性が解消されなければならない。そのための装置がセヴセヴである。ホスト側の人間はゲストの贈物を受けとることで、ゲストを自らの文脈に配置することができる。セヴセヴを終えれば、もはやゲストは「異人」ではない。同じ規範を共有し、同じ正統性を共有する、同じ社会組織の一員であるとみなされることになる。

セヴセヴを行う際には、ヤンゴーナを贈らねばならない。ヤンゴーナは、胡椒科のカヴァ (*kava*) の樹の根を乾燥させ、細かく砕いた粉末を水で濾したものである。カヴァはフィジー全土で広く栽培されている。ヤンゴーナは、フィジー人の日常生活および儀礼生活には欠かせない飲み物である。例えば、個人が相手に迷惑をかけ、それを謝罪するときや、誰かの家に滞在しその世話を求める場合などは、ヤンゴーナが用いられる。ゲストは、彼をその場に迎え入れた人間とともに、用意してきたカヴァの根または粉末をホスト側へ贈呈するという「形式」を踏まなければならない。それが受領されると、村の若者によってただちにヤンゴーナが準備される。そして、ゲスト側とホスト側の人間が、互いに口上を述べながら共飲するのである。これがセヴセヴである⁵⁾。

カヴァは、その栽培に手間がかかることもあり、今日では大規模な商業的農園において集約的に生産され、マーケットなどで販売されている。大規模栽培とマーケットでの販売は、ヤンゴーナを使用する儀礼には本来関係無いはずのインド人の手によるところが多い⁶⁾。これは、現在のフィジー人の日常生活にとって、ヤンゴーナが欠かすことの出来ない飲料であり、ヤンゴーナに対する莫大な需要があることを示している。ヤンゴーナは伝

4) 胡椒属の低木で、英名を *kava*、学術名を *piper methysticum* という。

5) トレンは以下のようにセヴセヴを説明している。「(前略)もし誰かに頼みごと(土地を借りたいとか子どもに名前をつけてほしいなど)をする場合、もしくは犯してしまった過ち(例えば父とか妻に手を出してしまった場合など)の償いを請う場合には、彼は年長者の誰かに対して、自分の代わりに頼みごとや償いの内容をこめたスピーチをしながらヤンゴーナを献呈することを頼む。受容され、ヤンゴーナが飲まれるときに、その頼みは聞き入れられ、あるいはその過ちは償われる」[Toren1990: 103-104]。

6) フィジーには、年季契約労働者として入植したインド人の子孫が多数住んでおり、インド系フィジー人は、フィジー人口に占める人種別割合の第二位である。

統的に、首長の即位式儀礼における象徴的な死と再生とを司るものとされていた⁷⁾。かつては、高位の首長が、儀礼においてのみ、飲むことを許されていたものであった。しかし今日では、その伝統的意味が薄れ、ヤンゴーナを日常的に飲むという慣習が新たな正統性を獲得した⁸⁾。彼らは、マーケットや後述する村の「商店」などで、乾燥したカヴァの根や粉末を購入する。その意味でカヴァは、象徴的意味を有する儀礼財であるが、同時に「商品」として、貨幣交換の文脈に置かれている。

セヴセヴは儀礼であるため、贈るべきカヴァの代わりとして、例えばその市場価格分の貨幣を贈答するという行為は裁可されない。しかしながら、現実問題としては、訪問時にカヴァを用意しておらず、急にセヴセヴをしなければならない状況も起こり得る。筆者が遭遇した場面では、村人の誰かが個人的に所有していたカヴァをゲストが「購入」し、それを再び村人へ「贈答」という手順を踏んでいた。

異質な存在である外来のゲストが自分たちの文脈に置かれるためには、ヤンゴーナによって、差異的な文脈の統合や同一化がなされなければならない。言い換えるならば、異なる社会的文脈、異なる正統性を内在させているゲストが来ることで「乱れ」が生ずる自分たちの日常世界を、定常状態へと矯正させるための装置として、ヤンゴーナという財の贈答を伴うセヴセヴの儀礼は解釈される。セヴセヴによって、ゲストは「こちら側の世界」へと正式に招かれ、正式な一員として社会的な承認を受ける。今や、ゲストとホストとの「彼我の別」は消失し、共に同一の世界に生きる存在として扱われることになるのである。

ヤンゴーナが受領された瞬間から、ゲストは「村人」の待遇で扱われることになり、村の社会組織の一員として相互扶助のネットワークの中に組み込まれる。例えばケレケレ (*kerekere*) は、そのネットワークの中で展開されるフィジー独特の互酬的交換形態である。フィジーの社会生活において、正統性を構成する価値のひとつが「互酬性」である。ケレケレは、その正統性を表象する実践の形式のひとつであると考えられる。彼らは欲しいものがあると気軽にケレケレし、ケレケレされた方は気前よくその求めに応じる。貸主はそ

7) ヤンゴーナ共飲の儀礼を巡っては様々な見解があるが [Hocart1972 : 27] [Sahlins1987 [1985] : 73-103] [Ravuvu1987 : 240-243], 彼らは、フィジーにおける外来王の即位式について言及している。外来王がヤンゴーナを飲むことは、彼が一度象徴的に「殺され」、再び「再生する」ことを意味している。外来王が彼らにとって甚だ異質な存在であり、彼を迎え入れると共に彼が自分たちの文脈と同一の規範を共有するものとして正式に置かれるためには「象徴的な死と再生」とがヤンゴーナによってなされなければならない。セヴセヴとヤンゴーナに関しては、[高橋2008 : 58-59] を参照。

8) ヤンゴーナを飲むというのは、個人的な行為ではなく、あくまでも象徴的な文脈に置かれた社会的行為である。ヤンゴーナは個人的な嗜好品として消費されるものではなく、その場における参加者の、年齢、性差、出自などの社会的関係を象徴する手順を踏みながら共飲されるべきものである。そのため、ヤンゴーナをひとりで飲むことは通常ありえない。

の場で対価を受けとらないために、多くの場合、それは一方的な供与になる。ただし貸主もまた、次の機会には誰かにケレケレを求める。ゆえに、彼らの中で均衡はさほど問題にはならない。何かが不足すれば、村の中で気軽にケレケレが行われる。食事のときタロイモが不足した場合や、紅茶を飲むとき砂糖が切れていた場合など、彼らは隣家に行ってケレケレをする。また、何らかの収穫があった場合などには、その場に居合わせた人びとに対して気前良く分け与えるべきであると考えられている。

ケレケレはあくまでも「貸してもらうこと」であり、物を「ねだること」とは違うという⁹⁾。資産の偏りがありなく、自給自足に近い経済生活を送っていたかつての村落では、誰もが同じような財を同じくらいだけ所有していた。例えばW村では、スーパーマーケットなどで購入する補完的な商品を除けば、少なくとも食料に関しては、ほぼ自給自足に近い経済生活を送っている。村の成年男性は、そのほとんどがタロイモを耕作している。W村の地理的環境では、タロイモの十分な収穫がほぼ一年中見込まれる。タロイモの余剰は必ず出るため、それをスバのマーケットで販売すれば、いくばくかの現金収入は得られるのである。給与所得者はほとんど存在していないため、若干の例外を除けば、W村民の社会経済的生存条件はほぼ等しいと言える。また電気が通っていないため、彼らの私的所有物の内訳に大差はない。こうした「場」では、仮に今、誰かから何かを「借りた」としても、貸した方はまたいつか必要ときに誰かからそれを「借りる」ことができるだろう。フィジーの伝統的村落社会ではこのように、財の流通は、相互扶助のネットワークの中で均衡を保ちつつ実現していた。

しかしNS村のように、スバに通勤する給与所得者が存在する状況、つまり村人の社会経済的生存条件に偏りがあるような「場」では、彼らの私的所有物の内訳にも大きな差が認められる。こうした「場」においては、「ケレケレしても良いと判断される財」と、「ケレケレすべきではないと判断される財」との明確な区分が生まれつつある。そして後者は明確に、貨幣交換の文脈に置かれている。

また、村には、社会組織を支える様々なタブーがある。フィジー社会では年長の男性が尊敬を受ける存在である。伝統的ヒエラルキーは、例えばヤンゴーナを飲む場などで体現される。飲む順番、座る場所、立ち居振る舞いなどのすべてに、村の秩序が表象されている。子どもや女性はヤンゴーナを飲んではいけぬ。もちろん飲酒もタブーである。また、

9) 筆者は調査地で質問票調査を行った。「ケレケレを表す英単語は何が適切か」というもので、選択肢には、borrow, rent, beg, get, be given, その他、を挙げた。回答数は63名である。その結果によると、回答者の84.1% (53名) が「borrow」を挙げ、以下「beg」(14.3%, 9名), 「be given」(1.6%, 1名), と続いた。なお、質問票調査の詳細は、[Takahashi2005] で詳細に検討している。

既存の図式に変更を加える行為も、一般的にはタブーとみなされる。ケレケレの対象を貨幣交換の文脈に置くことは、当然、タブーとみなされるだろう。例えば、村人同士でタロイモをケレケレすることは「妥当な」行為だろうが、都市のスーパーマーケットで販売されているタロイモをケレケレすることは「妥当ではない」行為といえるだろう¹⁰⁾。

以下では、二つの村で見られた四つの場面と、そこに現れたそれぞれの実践の諸相を比較することで、状況に対する彼らの意味づけがそれぞれ異なるさまを見ていくことにする。

2. 事例

場面①：捕まえた魚を売る（W村）

W村の傍を流れるワイニマラ川ではティラピアなどの川魚が獲れる。村で商業的漁業を営んでいる者はおらず、それぞれは散発的に漁をしている。漁は主に網や釣竿で行われるが、泳ぎの上手い者は潜ってヤスで突くこともある。漁獲高は一定しない。また、冷凍庫がないために、余剰が出てもそれを保存することは出来ない。したがって、獲れた魚は漁獲者の家族によってその日のうちに消費される。仮に余剰が出た場合には、近隣におすそ分けされる。伝統的な正統性に照らせば、村内で魚を販売する行為は望ましいことではない。

2002年9月のある日、モセセは、自家消費用の魚を獲るために漁業用の定置網を購入し、その翌日から漁を行った。以来彼は、毎日一定の魚を得る事になった。当然、余剰が出る。ある日、W村から少し離れた学校の宿舎に住むある教員夫人がモセセを訪ね、「余った魚を売ってくれないか」と頼んだ。モセセの妻であるマカレタはモセセに、売るように勧めた。モセセは迷ったが、大きい魚1匹と中くらいの魚3匹をF\$5で売ることに決めた。この取引に定価や相場は存在していない。

モセセ（29歳・男性）の実践

彼はかつて給与所得者としてスバで働き、放蕩三昧の暮らしを送っていた。しかしあるとき、彼は「神の声」を聞いた。それ以来彼は改心し、熱心なキリスト教徒になろうと心がけ、ついに牧師になった。彼は伝統を愛し、慎みを知り、周りに対してよく気を遣う。家族を大事にし、二人の幼い女兒をととても可愛がる。暇を見つけては読書をし、毎日の労働を規則正しく行うことを心がける。また彼は、青年教育プログラムに参加して日本に旅行した経験ももつ。

彼は、余剰の魚を販売する行為が最近村に広まりつつあることを知ってはいるが、自分

10) 筆者の行ったアンケート結果によれば、ケレケレの対象として「妥当な」ものは、村人によって様々であった。しかしながら、明らかに貨幣交換の対象である商品をケレケレすることに対しては、否定的な見解が多かった。

がそうした行為をすることには気乗りしない。もちろん網で漁をすれば、自家消費分を上回る余剰の魚が獲れることもあるだろう。しかし村では、魚をもつ者は、もたない者に分け与えるべきであると考えている。「売ってくれるように」と頼んだ教員夫人を目の前にして、彼は躊躇した。しかし、妻に熱心に説得され、また彼自身も「教員夫人はWの村民ではないのだから」と自分に言い聞かせ、最終的に売ることに決めた。

マカレタ (25歳・女性) の実践

マカレタはモセセの妻である。彼女はいつも明るく陽気で、よく笑う。噂話が好きで、よくあちこちの家でおしゃべりをする。新しいものが好きであり、好奇心が旺盛である。インド人が車で服を売りに来るのを見つけたときには、大はしゃぎですぐにそこへ走っていく。そのような振る舞いを年長者からたしなめられるような女性である。結婚して子どもが二人もいるのに、未だに娘気分が抜けきれないようなところがある。

モセセが定置網漁を始めて以来、魚の余剰が出るようになった。彼女はモセセに対して、それを村で売るようにしきりに勧めている。欲しいという人がいるならば、たとえそれが村の中であろうと、売っても差し支えないだろうと思っている。そして売った金を貯めて、カーペットを買いたいと思っている。モセセは「魚の村内販売」に反対であるが、今回は教員夫人が村外者であると言って彼を説得した。

村外者である教員夫人 (名前年齢ともに不明・女性) の実践

W村から約1kmのところ、小学校と、中学校がある。教員とその家族には、それぞれ宿舎が与えられる。教員用宿舎は一箇所固定されており、学校の敷地に隣接している。この夫人は、その中の一軒に住む教員の夫人である。この宿舎の住人たちはW村と様々な関係を持ち、人の行き来も激しい。

彼女は、モセセが定置網漁を始め、余剰が出ていることを情報として知った。彼女はかねてより、日常的に魚を食べたいと思っていた。しかし、彼女は漁をしないので、自ら魚を得る手段はなかった。そんな中、モセセの事情を知ったのであった。彼女はモセセに「売って欲しい」と積極的に交渉した。そして遂に、彼から魚を購入することができた。

場面②：捕まえた魚を売る (NS村)

スバに近いNS村は海に面しており、ボートとダイビングスーツを使った漁が盛んである。村内でボートを所有しているのは一名、ダイビングスーツを所有しているのは四名である。それ以外の人間は、それぞれのグループ単位で、ボートとスーツを所有者から借りて漁をする。その際のレンタル料金は、

ダイビングスーツレンタル一式F\$10, ボート代一人F\$15である。村には, 自ら漁に出ることなく, ボートのドライバーとして報酬を得る者もいる。この場合の報酬はF\$10である。獲った魚は冷凍庫に保存される。NS村で冷凍庫を所有する家は8戸ある。冷凍庫を所有しない家の人間は, 一晩につきF\$1を所有者に支払うことで, 魚を保管してもらうサービスを購入できる。また, 冷凍保存されている魚は, 随時, その所有者から購入することができる。村内では, 1バンドル¹¹⁾の魚がF\$10で販売される。ダイビングスーツ, ボート, 冷凍庫のスペースなどのレンタルサービスや, ドライバーの雇用, あるいは魚の小売りに対する価格はある程度固定化されている。また彼らは, 毎晩の収穫を冷凍保存しておき, 毎週土曜日にスバの魚マーケットにそれらを売りに行く。首都のスバではF\$15~18程度で売れる。こちらもだいたい価格は定まっている。

セル (30代・男性) の実践

NS村のセルは, 筆者のインフォーマントであり, 村の女性グループの指導的立場にあるマライアの次男である。彼は, 非常に穏やかな性格であり, 村では精力的に漁に励む青年のひとりである。

2003年4月8日の夜, 彼は漁に出た。この夜は不漁で, セル自身は4バンドルの魚しか獲れなかった。同行者は彼を含めて五名であり, 獲った分がそのまま自分の獲り分になる。時には10バンドルくらいの魚を獲ることもある。セルはお金を貯めて, 将来自分のボートやダイビングスーツを買う夢をもっている。しかしそれら一式をたとえ得ることができたとしても, それらをレンタルするビジネスをするのではなく, 漁に出続けたいと思っている。

場面③：商品と商店経営 (W村)

W村では数年前から, 五軒ほどの家が「商店」をしている。村からスバまでは遠いので, 彼らが買い物で頻りにスバを訪れることはできない。彼らは週に一回, バスで四時間以上かけてスバに行き, タロイモやキャッサバなどの収穫物をマーケットで売る。そして, 得た現金で生活物資を購入する。その際に「商品」も仕入れて村で販売するのである。そういった商店には, 子どもが塩豆, 飴, ガム, マンゴスキンなどのお菓子を買に来る。成人男性はタバコやカヴァの粉末などを買に来る。成人女性はクッキングオイルやツナ缶などを買に来る。商店で売られている商品は, 灯油やベンジンなどの燃料, 砂糖, 塩, 油などの調味料, ヌードル, 小麦粉, ベーキングパウダー, 米, ダルなどの準主食, トイレットペーパーや歯磨き粉などの生活用品などであり, すべて「購入された財」である。それぞれの商店で扱う商品の種類に大差はなく, 売値もだいたい一定である。

11) 彼らは魚やタロイモなど, 一定の大きさにまとめて縄で結わえる。これが「1バンドル」の単位となる。もちろん, 正確に計量して結わえているわけではない。

ライサニ（30代・女性）の実践

ライサニは、筆者が滞在していた家の主婦であり、村では有力な親族集団に属している。彼女の親族集団の中には、オーストラリアで実業家をしている男性もいる。彼女自身は、スバの専門学校で経理の勉強をした経験をもつ。彼女は1997年頃、塩豆を家で販売することを思いついた。その後、カヴァの粉末、タバコ、飴、缶詰、ヌードルという順に商品を増やしていった。フィジーの多くの村で商店が破綻する原因のひとつが掛売りであると認識しており、掛売りの要望には応じないと決めている。彼女はこの販売行為を、利潤目的のビジネスであると明言する。しかし、村内の他の商店の動向を探ったり、差別化戦略をとって競争を勝ち抜くという意識はほとんどない。帳簿をつけることもしないので、期末にどれくらいの利益が生じているのかについての知識はない。

2002年9月25日、ライサニの母であるベナイシが、スバに農産物を売りに行った。彼女は、毎週水曜日にスバに出かける。この日の売り物は、タロの葉とタロイモであった。仮に完売すれば、タロの葉がF\$15、タロイモがF\$80になり、合計F\$95の収入となる¹²⁾。そしてライサニは、商店のために仕入れる商品リストをベナイシに渡し、スバで購入するように頼んだ。今回の仕入れは、クッキー3袋、チョコ棒4袋、塩豆2袋、ツナ缶20個、鯖缶16個、カヴァの粉末1kgであった。タバコはまだ在庫があるので、今回は補充の必要はなかった。

場面④：商品と商店経営（NS村とND村）

NS村には、スバに定職をもち、村から通勤している給与所得者が六名いる。NS村からスバへは、ボートとバスを乗り継いで一時間半程度で着くので、通勤は可能である。NS村には電気が通っており、耐久消費財を所有している家も多い。村人の中には、自分の家に冷蔵庫があり、冷えたビールを飲む者もいる。このNS村の環境では、多くの財やサービスが、市場交換の対象となっている。冷凍庫で保存した魚や、冷凍庫で魚を保存するサービスもまた、ひとつの商品である。さらに、フィジーの儀礼には不可欠な儀礼財のひとつであるインベ (*ibe*)¹³⁾ も、NS村では商品と化している。インベは、今も依然として、高い儀礼的需要がある。従来インベは、各家庭の女性が自分で編むものであった。しかしNS村には現在、インベを編める女性がほとんどいない。彼女たちは必要に応じて、完成

12) マーケットでのタロイモの売値は、F\$1.10/kg くらいである。ひとつのタロイモの重量は、およそ2.5-3.0kg 程度。収穫までには、6-7か月を要する。

13) バングラスの葉を編んで作られたマット。実用的価値と儀礼的価値をもつ。日常生活において、インベはマットとしての実用的価値をもち、屋内や屋外で頻繁に使用されている。またインベの儀礼的価値は、都市部においても依然として失われてはいない。結婚式や葬式などの儀礼の度に、インベは必要となる。フィジー人にとってインベの需要は依然高い。本来インベは、冠婚葬祭において贈与する分と、通常使用する分とを合わせて、多くの枚数が常時ストックしておくべきである。しかし、特に都市部では、インベは市場における商品となっているため、必要に応じて購入する人も多い。

品のインベを購入する。また、近隣には、漁村ではないND村がある。かつて、魚を獲らないND村と、タロイモを作らないNS村とのあいだには、魚とタロイモのバーター交換があった。そんなNS村やND村でも数軒の家が商店をしている。

ドモレ（32歳・男性）の実践

ドモレは、NS村から徒歩10分弱の隣村、ND村に住む男性であり、マライアの親族である。非常に快活な性格であり、賢くもある。看護学校の受付としての定職をもつが、三か月働いては三か月休むという契約のパートタイム労働者である。

彼は数年前から、自分の家でタバコやカヴァの粉末を販売している。彼は、商店における収益を正確に把握しており、それを将来に向けて貯蓄している。彼は、今後購入予定の家具を具体的に想定し、その値段と現在の自分の貯蓄状況に鑑みて、自分がいつ頃それを購入可能になるのかという将来の計画を「実現可能な与件」として描いている。彼はこれまでも、テーブルやソファーなどの家具を自らの計画通りに貯蓄した資金で購入してきた。

マライア（60代・女性）の実践

マライアは筆者のインフォーマントであり、思慮深く、開明的で、かつ活動的な女性である。NSは、焼き物を焼き、それを首長たちに献上するという伝統的役割を担ってきた村であり、マライアとその親族は、焼き物、絵画、ダンス、オブジェ創作、などの芸術活動に携わる指導的立場を担っている。彼女は、ニュージーランドに焼き物技術を教えに行ったこともあり、英語も流暢である。

マライアは、インベを編める数少ない女性のひとりである。彼女は1990年頃、村でインベを売り始めた。当初は、小銭を稼ぐために、簡単なインベを編んではF\$10~20で売り始めた。しかし今では、白いインベでF\$60、白黒の模様が入ったインベだとF\$150~200が相場だという。他方、焼き物の伝統も村で廃れつつあり、焼き方を知らない女性も増えている。マライアは村の女たちに、インベ作り、あるいは焼き物作りの仕方を教え、彼女たちにやらせようとしている。しかし彼女たちは、貝集めの方が簡単で良いとって覚えようとしなない。海の資源はやがて枯渇するとマライアは言う。NS村には、焼き物の伝統がある。それを覚えて伝えていくべきであるのに、彼女たちは覚えようとしなない。そしてインベも、冠婚葬祭の度にわざわざ購入する羽目になっている。マライアはこの現状に憤慨している。

3. 考察—偏倚の諸相

スバに近く、近代化が進んでいる NS 村だけではなく、スバから遠く、伝統的な生活様式が残っている W 村でも、近代的市場システムの波は押し寄せつつある。この文脈で「近代化」は、「場」に現れる諸実践の相互作用の結果、「資本主義のハビトゥス」がいかにかに自らのハビトゥスに追補されるのか、という点で理解される¹⁴⁾。経済合理性に代表されるような、資本主義の世界が要請する様々な価値の体系は、NS 村においても W 村においても、村人たち自身のハビトゥスの内に構造化されつつあるだろう。互酬性の対象であった財が「商品化」されたり、相互扶助の領域を「利潤追求行動」が覆い始めるという事例を見ると、その構造化の過程が確実に進行しつつあることを理解できる。ただし、資本主義のハビトゥスを表象した実践が現出するその頻度と濃度において、NS 村という「場」と W 村という「場」とのあいだには、明確な差異がある。例えば、NS 村と W 村の人びとの実践を観察すれば、前者の人びとの方が、資本主義のハビトゥスを表象した実践をより多く行っていることがわかるだろう。したがって、前者では「近代的な」正統性が再生産され、後者では「伝統的な」正統性が保持されるという傾向が見られる。しかしその反面、前者では「伝統的な」正統性を表象する実践が時折拮抗し、後者では「近代的な」正統性を表象する実践が現れる。そしてこれらの諸実践のせめぎあいの中で村人たちは、新たな社会経済的環境に順化しようともがきつつ、その局面における妥当な振る舞い方を模索して「さまよい」ながら、偏倚的実践の相をつくりだしている。

場面①と場面②における、捕まえた魚の事例を見てみよう。

まずはじめに、W 村のモセセの事例である。モセセは「魚は販売するのではなく分け与えるべきだ」という判断基準をもっていた。他方、余剰の魚を販売することは新たな現金収入の途でもある。WS 村において魚は、缶詰や砂糖のように貨幣交換の対象として正統性を獲得している財ではない。また、村民相手の販売行為は、相互扶助の伝統的文脈から逸脱するものでもある。彼のハビトゥスには、牧師として伝統を尊重しようとする性向と、給与所得者の経験から現金収入の意義を理解する力能という「主体的要素」が構造化されていた。そして同時に、W 村内における販売行為の位置づけが未だ曖昧であるという「客体的要素」もまた構造化されていた。結果として、彼のハビトゥスが導き出した結論は、「販売はする。しかしそれは、自発的な決断ではないし、さらに相手は村外の人物である」という、実に消極的なものであったと考えられる。モセセのこの選択と、村内で

14) [高橋2016b] を参照。

他にも広がりつつある「魚の村内販売」という諸実践が、将来、正統性を獲得したときには、彼らの偏倚的实践は「革新」として位置づけられることになるだろう。

ところで、W村という「場」の同じ場面においても、この状況に異なる意味を付与していた人物がいた。モセセ夫人のマカレタと、魚を販売してくれるように頼んだ教員夫人である。

マカレタは、非常に明るく陽気だが、その反面、やや短慮な実践を見せることがある。彼女のハビトゥスに刻まれたそのような性向のため、しばしば状況を弁えない行為を選択し、年長の女性からたしなめられることもある。そんなときでも彼女は、いたずらっぽく笑いながら舌を出して、あまり意に介さないそぶりを見せる。彼女は、当初より、「魚の村内販売」に肯定的であった。彼女は、モセセとまったく同一の社会経済的生存条件をもちながら、モセセとはまったく異なる感覚を有していた。彼女にとってそれは、伝統的規範に抵触するかどうかという判断の問題ではなく、彼女自身の物欲をかなえる手段の問題であった。また彼女は、新しもの好きという性向をもっている。たとえそれが、伝統的な「場の正統性」に抵触するかもしれないと感覚的に気がついていても、新しい形式を選択する際の彼女の「壁」は低かったのだろう。彼女にとって重要なのは、伝統の保持ではなく、自らの私欲であった。ただし、「魚の村内販売」という偏倚的实践が起こす相互作用には、彼女のような考えもまた反映されることになる。彼女の性向は、直接的に革新を生む力能ではないだろう。しかし、もし将来、「魚の村内販売」がW村で裁可されれば、彼女や、同じような感覚をもつ彼女以外の他者が行う諸実践もまた、W村という「場」におけるひとつの情報として機能したということになるだろう。

教員夫人は、厳密にはWの村人ではない。教員は勤務地をある程度、自分の希望で選べる。約三年の周期で転勤もあるが、希望を出せば残れる。勤務しているあいだは近隣の村と緊密な関係を結ぶが、それは永続的なものではない。彼女はW村の近隣に起居しており、Wの村人とのあいだにある一定の経済的関係の中で生きていた。彼女の日常生活においては、W村の商店で商品を購入することもあっただろうし、村人とのあいだでケレケレを行うこともあっただろう。その意味で彼女は、W村の相互扶助のネットワークの中に組み込まれた存在であるといえよう。他方、この教員夫人は、W村という「場」の正統性を体得してはいるが、自らの存在をその「場」の外側に置くことができる存在で

もある¹⁵⁾。これはまさに、B.F. ホゼリッツの言う「マージナルマン」の位置であり¹⁶⁾、偏倚的实践が生じやすい社会的文脈であるだろう。さらに彼女は、村ではほとんど存在しない給与所得者でもある。半ば自給自足的に生計を立てている村民と、定期的に給与を得て生活する彼女とでは、資本主義のハビトゥスが身体化されている程度が異なるだろう。彼女の場合、必要だが自らは入手不可能な財は、明らかに貨幣交換の対象であった。例えば片道四時間のバスでスバのスーパーマーケットに出向き、商品の魚を購入してまたバスで戻ってくる、という費用を考慮すれば、モセセから購入する方がはるかに効率的であり、経済合理的であるだろう。このケースでは、機会費用のロジックが彼女のハビトゥスに構造化され、それを含む判断が実践に構造化していたと考えられるのではないだろうか。さらに彼女は、「魚の村内販売」が正統性を獲得するかどうかの瀬戸際にあるという、W村という「場」に現れる諸実践の相互作用にも精通していた。彼女が給与所得者であり、貨幣交換の文脈を生きる主体であることを考慮すれば、彼女のケレケレに対する意味づけは、村人のそれとは明らかに違っていたのかもしれない。「購買財」である缶詰であれ、「非購買財」である魚であれ、財の如何を問わず自らが欲するものはすべて、貨幣交換の対象とみなす感覚を有していたと考えられる。しかしながら反面、村で正統性をまったく獲得できていない行為、すなわち、明らかなタブー行為は、選択すべきではないと判断する感覚もまた有していたはずである。彼女のハビトゥスは両義的である。「マージナルマン」として、W村という「場」の内と外とを行き来することが可能な彼女は、市場社会における正統性とW村における正統性の双方を身体化させている。W村において「魚の村内販売」が、正統性を獲得したわけではなく、かつ、もはや明らかなタブーでもないという曖昧な状況に鑑みて、彼女はモセセに魚の販売を頼んだのである。

次にセルの事例について考察しよう。セルは真面目な性格であり、勤勉に漁に取り組んでいる。「獲った魚」を商品化するという第一次産業だけでなく、「一時的使用权」をサービス商品化するという第三次産業にも彼は関係しており、そうした行為を「妥当なこと」と判断する正統性を自らのハビトゥスに内在化させていた。それは、NS村の代表的生業である漁業で中核を担うという彼の社会的位置が、彼の内に構造化されているということを示している。また、後述するドモレと同様に、現在の資金と貯蓄とを合算し、ダイビングスーツとボートを購入したいという将来の夢をもっていた。不確実な未来における自分

15) その意味では筆者もまた、彼女と類似の存在であった。セヴセヴを終えていたため、基本的にはW村民として扱われるが、時には「外国人」として、様々な特例措置や特別な解釈が施されることもあった。

16) ホゼリッツは、東アフリカにおけるインド人移民のように、文化的に曖昧な位置にあるものを「マージナルマン」と呼んだ。マージナルマンは、既存の秩序に違反的な行為をとったり、既存の社会的価値のヒエラルキーに反対するなどして、積極的に逸脱する傾向がある。[Hoselitz1963b : 11-31] 参照。

の行為を「あり得ること」として管理することができる感覚も、もち合わせていた。それらは、様々な費用と報酬とを伴う日々の漁と、漁をめぐる経済的組織化の中で培われたものであると考えられる。反面、レンタルサービスという第三次産業の商品に対しては、さほど積極的ではないさまが垣間見られた。後述するように、彼の母であるマライアは、伝統への回帰を象徴する諸実践を彼の周囲で生み出していた。そうした「場」で起居するという環境が、彼をそのように方向づけているのかもしれない。NS村は伝統的に漁村である。サービス経済はあくまでも傍流であり、魚を獲る行為こそがNS村の正統な生業であるとする、いわば「漁師の矜持」のような感覚が、セルのハビトゥスから生まれているのかもしれない。

W村のモセセも、NS村のセルも、自ら捕獲した魚を村で販売するという同一の行為を選択していた。ただし、この行為に関する状況は、これら二つの「場」で大きく異なる。NS村における「魚の村内販売」という行為はすでに偏倚的とはみなされない。「魚の村内販売」は、NS村という「場」の正統性を反映させた実践である。それに対してW村では、「魚の村内販売」が未だに完全なる正統性を獲得しきれていない¹⁷⁾。それは、W村という「場」に生じた偏倚的实践である。そしてモセセの判断にそうした志向性を与えていたのは、相互扶助の組織化が未だにある程度機能しているW村¹⁸⁾という「場」の、いわば「客体的な」要素だけではない。彼には、かつての自暴自棄な生活を改めて、今では村の伝統を尊重しようとする、敬虔なキリスト教徒としての性向が備わっていた。加えて彼は、スバでの給与所得者としての経歴や、W村ではかなり珍しい海外渡航歴などをもち、資本主義のハビトゥスを自らのハビトゥスに追補させる経験を豊富にもっていた。これらの「主体的な」要素をも含む彼のハビトゥスが、この文脈を「村外の教員夫人なら販売しても良い」という意味に書き換える彼の判断をもたらしたと考えられる。

次に、場面③と場面④を検討する。フィジーの伝統的な規準では、自然に働きかけて獲得した財は、相互扶助の伝統的組織の中で流通され、分配されるべきであると考えられている。

W村のライサニの事例を考察しよう。ライサニは1997年頃、商店を始めようとする発

17) 筆者がW村で行った質問票調査の結果によれば、村民24名中12名（50%）が、川魚をケレケレの対象とみなしていた。つまり、「魚の村内販売」に関しては、それが妥当なことなのかどうかをめぐる判断が、個々人のあいだでかなり揺れていることを示している。

18) 例えば、川で魚を獲った人に対して、魚を周囲に分配するようにという年長者の指示が与えられるケースもあった。魚を商品として扱う事例が拡大しつつある一方で、依然としてそれをケレケレの対象として位置づける見解が存在していることがわかる。そしてW村では、こうした年長者の「指示」が村の正統性を直接的に表現していることが多い。

想を得た。彼女は村の有力な親族集団に属している。オーストラリアで実業家をする親族がいたり、他の家には見られない家財を所有している。W村における彼女の親族は、卓越的な位置を占めていると言える。彼女自身もスバにある、経営系の専門学校で高等教育を受けている。彼女のこうした経験は、文化資本として、彼女のハビトゥスの内に構造化されている。そして彼女のハビトゥスが、当時はまだそれほど一般的ではなかった「商店経営」という発想を生み出したと言えるだろう。しかしW村では、貨幣交換の形態は未だ散発的である。取引される財は、その量も種類も限定的であり、新たな商品が村内市場に現れることもほとんどない。彼らの生業はあくまでも農業であり、商店は副次的な意味しかもたない。商店のみで生計を立てる家計は存在していないのである。彼女の商店は、後述するNS村やND村の商店に比べると、お金の出し入れを会計として処理したり、経費や損益分岐点を考慮して売値を決めるといった、経済合理的な商業としては成立していない。彼女は、「儲けにならないから掛け値販売はしない」¹⁹⁾と常々話していた。村では常に現金が不足している。村人は、タロイモをマーケットで販売することで主たる現金収入を得ているが、貯蓄や手持ちの現金はほとんどない。ゆえに彼らは商店主に、しばしば「つけ」を頼むのである。しかしそれは、不払いになることが多い。ライサニはこの点を、専門学校の経営学の授業で学んだと話していた。彼女は確かに、「掛け値販売はしない」という表面的な経営戦略をもってはいた。しかし、期末の利潤を正確に把握していたというわけではなかった。もしかしたら損失を計上していたかもしれないのである²⁰⁾。

W村とNS村、あるいはND村において、事例紹介のところで明らかにした商店はすでに一般化しており、それぞれの「場」で正統性を獲得している。上の例で見たように、W村では、「購買された財」を新たに商品として販売する行為は、すでにある程度、正統とみなされている。モセセの判断が揺れていたのは、魚が「購買された財」ではなく、「彼が自ら捕獲した財」であったからである。他方、ライサニが販売している財はすべて、スバで購買された商品であった。したがって、彼女の行為は正統的である。

NS村とND村では、あらゆる財やサービスを商品として貨幣交換する行為は、すでに

19) 村人はよくクレジット販売を頼むことがある。手持ちの現金がない場合、それを「つけ」にして週末あるいは月末に一括で支払うことを約するのである。しかし、個人的所有の概念や約束の遂行、信用といった資本主義のハビトゥスが身体化されていない村人は、しばしば、それを踏み倒す。あるいは、支払いを先延ばしにし続け、最後には管理人の事務能力では処理し得ない事態に陥る。クレジット販売を頼まれた管理人のほうもまた、相互扶助の原理が正統性をもつ村の中では、その依頼を無下に断ることはし難い。かくして、そのような商店は、運営困難になり消滅するケースが非常に多いのである。

20) ブルデューもアルジェリアの事例の考察から、以下の点を指摘している。「大部分の人々が、文盲で、複式簿記を知らず、家計と企業会計との区別も知らず、しばしば、売上高と利益とを混同してしまうのだ」[ブルデュー1993: 98]。

かなりの程度正統的である。例えば、冷凍庫を一晩借りるという行為でさえ、伝統的相互扶助の文脈を離れて、サービス商品と化している。村人の周囲には、スバに通勤する給与所得者も多いし、かつての給与所得者も多数存在している。さらに、彼らの家には多種多様な耐久消費財が溢れている。彼らは、財やサービスは市場交換の対象であると認識する資本主義のハビトゥスを、十分に身につけているように見える。専門学校で経営学を学修したものの、「感覚」としては定着していないライサニとは異なり、いわば「資本主義の海」を泳いでいくのに必要な「感覚」を、彼らは日常の実践を通じて体得していたのである。

次にND村のドモレの事例を考察する。ドモレはパートタイムの給与所得者である。彼はその地位を保持してきた経験から、不確かかつ非現実的な将来を、三か月刻みで捉えることができる感覚を身につけていた。三か月間離職しても、また三か月後には復職できる。三か月間収入がなくとも、また三か月後には定収入を得ることができるのだ。ただし収入が途絶えるその三か月間は、それまでの貯えで生活をやりくりしなければならない。つまり、三か月分の給与は六か月分の生活費なのである²¹⁾。この点を把握できる感覚を体得していた彼は、将来に備えて、現在有する利用可能な資源を合目的的に配列する力能を有していた。彼は自ら営む商店から得られる利潤と断続的に得られる給与とを、不確実な将来における「確実なもの」として認識していた。そして、不確実な将来のある時点における収支バランスから、購入予定の家具をどの時期に買い入れることができるのかという点を、彼は明確に予見することができていた。彼は、資本主義における労働契約や規則的な給与の意味を理解していた。彼はその経験を文化資本として構造化させていたのである。

マライアは、ビレッジツアー客を世話したり、彼らに焼き物やインベを実演販売したりという実践を日常的に行っている。NS村では、1987年頃から観光客のビレッジツアーを受け入れている。NS村には焼き物というユニークな特色があるので、ツアー会社もそこに着目したのである²²⁾。彼女はそのような社会経済的環境の中で、資本主義のハビトゥスを十分に体得しているように見える。彼女は、NS村においてはもはや貴重である、インベ作りや焼き物作りの技術をもつ。彼女はそれらを文化資本として活用し、それらの価値を市場で実現させることで、彼女の社会的地位と経済基盤を再生産させていた。NS村では、

21) 資本主義のハビトゥスを体得できていない多くの村人は、給与所得者として都市にでてきたときに、週給という制度になじむことができない。フィジーでは週給制度が一般的であるが、一週間分の給与を得ると、一度にすべて浪費してしまい、翌日からの生活費に困り果てるのである。

22) 会社側は、観光客一人あたり F\$7を村に支払う。そのような契約を交わしている点を見ても、NSの村民にはかなりの程度、資本主義のハビトゥスが浸透してきていると思われる。マライアのインベ編みも、ツアー客に見せるためのひとつのアトラクションとなっている。ツアー客はガイドの説明を聞きながら、マライアがインベを編むのを見学し、焼き物を見る。インベや焼き物は「商品」である。NSの村人は、彼らの伝統を「演じる」ことも商品になりうるのだということを経験的に理解してきた。

すべての財やサービスが市場における貨幣交換の対象として目されるようになってきている。従来は儀礼交換の文脈に位置していたインベや焼き物もまた、今では貨幣交換の文脈で取引されることが正統的である。その中であって、インベや焼き物作りの伝統は守るべきだというマライアの感覚はむしろ、逆の意味で偏倚的だと言えるかもしれない。

近代化の中で、インベや焼き物を女性が製作するという伝統的実践は廃れつつある。すべての女性が製作に携わるべきとする価値観は、もはや合理的とはみなされなくなりつつある。他方、インベや焼き物が有する、儀礼的な価値は消失していない²³⁾。例えば、普段はスパで給与所得者として生活し、儀礼があった際に村に帰ってくるような人びとでさえも、インベを不要であるとは考えない。かといって自ら編むことは、技術的にも時間的にも難しい。ゆえに彼らは、購買したインベを持参して儀礼に参加するのである。

おわりに

グローバル化により社会経済的環境が変化する中で、個々人はその新たな環境に順化しようと試みる。新たな文物や制度、そして価値観などが流入する環境では、資本主義のハビトゥスに合致する行為選択を要請される局面にますます遭遇するようになる。その局面を迎えた個々人は、伝統的な「場」における正統性と、近代的な「場」における正統性の狭間で、妥当な実践の形式を求めようとする。自らの性向と培った経験に裏打ちされた力能を発揮して、妥当な実践の形式を探ろうとするのである。結果として、同じ個人でも、ある局面と別の局面とのあいだに、あるいはまた、同じ局面でも、その「場」にいる個々人のあいだに、異なる順化の諸相が現れる。加えて、同じ行為でも、ある「場」と別の「場」の個々人のあいだに、資本主義のハビトゥスの体得の度合いに応じた異なる判断が生まれるのである。それらは、性向に由来する彼らの一次的ハビトゥスと、構造化された経験の意味に基づく力能の差異、および、彼らが活かすことのできる文化資本の差異に起因している。他方、彼らのハビトゥスを表象した諸実践が繰り広げられる「場」に対して、その相互作用を通じて得られる解釈の差異にもまた起因している。

客体的要素はそれぞれの文脈で構造化され、その構造化された主体的要素はそれぞれの文脈で構造化する。近代化の進展と共に、社会経済的環境は変化し、利用可能な資源の構成も同様に变化する。「場」に現れる社会的行為の組織化の形式は、その新たな環境に適合的になるように、ある場合には簡略化され、ある場合には変異することになる。そして

23) これは、近代化を遂げた先進諸国にあっても、経済主体が市場で示す実践の様相は、その市場が置かれた固有の文脈を反映してそれぞれ特徴的なものになるという論点を拓く主題である。

その変化は、その「場」に現れる偏倚的实践と、それがひとつの「革新」として正統性を獲得していく過程の中で把握される。この点で地域社会の「近代化」は、個々人が資本主義のハビトゥスを体得する過程として理解されるのである。

参考文献

- Belshaw, C. S., "The cultural milieu of the entrepreneur: a critical essay," *Explorations in entrepreneurial history*, 7(3), 1954-55, pp.146-163.
- Bloomfield, R., *Pacific Social Science: Book 1 Families in Change*, Auckland: Longman, 1997.
- Bloomfield, R., *Pacific Social Science: Book 2 Communities and Environment*, Auckland: Longman, 1999.
- Bourdieu, P., *Algerie 60*, Paris: Editions de Minuit, 1977 (原山哲訳『資本主義のハビトゥス—アルジェリアの矛盾—』藤原書店, 1993年)。
- Bourdieu, P., *La Distinction: critique sociale du jugement*, Paris: Éditions de Minuit, 1979 (石井洋二郎訳『ディスタクシオン—社会的判断力批判 I』藤原書店, 1990a年, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン—社会的判断力批判 II』藤原書店, 1990b年)。
- Bourdieu, P., *Le sens pratique*, Paris: Éditions de Minuit, 1980 (今村仁他訳『実践感覚 I』みすず書房, 1988年, 今村仁他訳『実践感覚 II』みすず書房, 1990c年)。
- Chandra, R. (eds.), *An Atlas of Fiji*, Suva: SSED, USP, 1998.
- Donnelly, T. A. (eds.), *Fiji in the Pacific*, 4th edition, Qld, Australia: The Jacaranda Press, 1994.
- Firth, R., *Primitive Polynesian Economy*, George Routledge & sons, 1939.
- Firth, R., "Religious Belief and Personal Adjustment," in *Essays on Social Organization and Values*, ed. by R.Firth, The Athlone Press, 1948, pp.257-293.
- Firth, R., "Social Changes in the Western Pacific," in *Essays on Social Organization and Values*, ed. by R.Firth, The Athlone Press, 1953, pp.191-205.
- Firth, R., "Social Organization and Social Change," in *Essays on Social Organization and Values*, ed. by R.Firth, The Athlone Press, 1954, pp.30-58.
- Firth, R., *Social Change in Tikopia: Re-study of a Polynesian community after a generation*, George Allen & Unwin, 1959.
- Firth, R., *Elements of Social Organization*, 3rd edition, Boston: Beacon Paperback, 1963[1951] (正岡寛司監訳『価値と組織化—社会人類学序説—』早稲田大学出版部, 1978年)。
- Firth, R., *Essays on Social Organization and Values*, paperback edition, The Athlone Press, 1969 [1964].
- Firth, R., *We the Tikopia*, paperback edition, Stanford University Press, 1983 [1936].
- Foucault, M., *Securité, Territoire, Population: Cours au Collège de France (1977-1978)*, Gallimard/Le Seuil, 2004 (高桑和巳訳『安全・領土・人口: コレージュ・ド・フランス講義 1977-1978年度 (ミシェル・フーコー講義集成 7)』筑摩書房, 2007年)。

- Geddes, W. R., *DEUBA: A Study of a Fijian Village*, Suva: USP, 2000 [1945].
- Geertz, C., "Social change and economic modernization in two Indonesian towns: A case in point," in *On the theory of social change: how economic growth begins*, ed. by E. E. Hagen, 1962, pp.385-407 (小泉潤二編訳「インドネシアの二共同体の社会変化と経済発展—事例研究」(小泉潤二編訳『解釈人類学と反＝反相対主義』みすず書房, 2002年, 127-165ページ))。
- Geertz, C., *Peddlers and Princes*, Chicago and London: The university of Chicago press, 1963.
- Geertz, C., *Islam observed: religious development in Morocco and Indonesia*, Chicago ; London : University of Chicago Press, 1968 (林武訳『二つのイスラーム社会』岩波新書, 1973年)。
- Geertz, C., "Culture and social change: The Indonesian case," *Man (N.S.)*, 19, 1984, pp.511-532 (小泉潤二編訳「文化と社会変化—インドネシアの事例」(小泉潤二編訳『解釈人類学と反＝反相対主義』みすず書房, 2002年, 166-193ページ))。
- Hocart, A. M., *Kingship*, London: Oxford University Press, 1972 (橋本和也訳『王権』人文書院, 1986年)。
- Hoselitz, B. F. (eds.), *Industrialization and society: proceedings of the Chicago conference on social implications of industrialization and technical change, 15-22 September 1960*, Paris: Mouton for Unesco, 1963a.
- Hoselitz, B. F., "Main concepts in the analysis of the social implications of technical change," in *Industrialization and society: proceedings of the Chicago conference on social implications of industrialization and technical change, 15-22 September 1960*, eds. by B. F. Hoselitz, 1963b, pp.11-31.
- Nayacakalou, R., *Leadership in Fiji*, London: Oxford University Press, 1975.
- Nayacakalou, R. R., *Tradition and Change in the Fijian Village*, Suva: South Pacific Social Science Association, 1978.
- Ravuvu, A. D., *Vaka i taukei = The Fijian Way of Life*, Suva: Institute of Pacific Studies of the University of the South Pacific, 1983.
- Ravuvu, A. D., *The Fijian Ethos*, Suva: Institute of Pacific Studies, USP, 1987.
- Sahlins, M. D., *Islands of History*, paperback edition, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1987 [1985].
- Takahashi, R., "Going beyond inculturation and acculturation: Change, culture and Tikopia society," *ER Osaka City University Economic Review*, 36(1), 2000, pp.45-70.
- Takahashi, R., *Habitus and Social Change in Fiji*, Thesis for PhD degree, University of Durham, 2005.
- Takahashi, R., "An examination of two views about a definition of culture," *ER Osaka City University Economic Review*, 41, 2006, pp.85-106.
- Thomas, N., *Entangled Objects*, Cambridge: Harvard University Press, 1991.
- Toren, C., *Making Sense of Hierarchy: Cognition as Social Process in Fiji*, London: Athlone, 1990.

- ギアツ, C. 『解釈人類学と反 = 反相対主義』 小泉潤二編訳, みすず書房, 2002年。
- 近代日本研究会編 『明治維新の革新と連続: 政治・思想状況と社会経済』 山川出版社, 1992年。
- 坂本多加雄 「「企業者」観念の発見と日本の伝統」(近代日本研究会編 『明治維新の革新と連続: 政治・思想状況と社会経済』 山川出版社, 1992年), 303-331ページ。
- 塩田真典 『市場・企業・企業者精神』 晃洋書房, 2010年。
- 実践社会学研究会編 『実践社会学を探る』 日本教育財団出版局, 2016a年。
- 実践社会学研究会編 『実践社会学を創る』 日本教育財団出版局, 2016b年。
- シュムペーター, J.A. 『経済発展の理論 (上)』 塩野谷祐一他訳, 岩波書店, 1977a年。
- シュムペーター, J.A. 『経済発展の理論 (下)』 塩野谷祐一他訳, 岩波書店, 1977b年。
- 瀬岡誠 『企業者史学序説』 実教出版, 1980年。
- 瀬岡誠 『近代住友の経営理念: 企業者史的アプローチ』 有斐閣, 1998年。
- 高橋玲 『「場」の慣習行動に見られる相同性—フィジー社会の経済人類学的考察—』 大阪市立大学経済学研究科学位論文, 2008年。
- 高橋玲 「文化と権力—ブルデュー」(中村健吾編著 『古典から読み解く社会思想史』 ミネルヴァ書房, 2009年), 247-266ページ。
- 高橋玲 「グローバリゼーション, 市場システム, 地域経済—経済人類学の新たな地平」(実践社会学研究会編 『実践社会学を探る』 日本教育財団出版局, 2016a年), 206-211ページ。
- 高橋玲 「怠惰? あるいは, 不真面目?—資本主義的ハビトゥスと途上国の近代化」(実践社会学研究会編 『実践社会学を創る』 日本教育財団出版局, 2016b年), 208-213ページ。
- 高橋玲 「地域社会における偏倚的实践と正統性の変革—R. ファース, J.A. シュムペーター, C. ギアツ, P. ブルデューと経済人類学—」 『大阪産業大学経済論集』 18(1), 2016c年, 57-79ページ。
- 高橋玲 「文化的な経済人?—企業者史学と市場概念の再検討—」 大阪市立大学経済学研究科 Discussion Paper No.94, 2016d年。
- 田辺繁治 「再帰的人类学における実践の概念—ブルデューのハビトゥスをめぐり, その彼方へ」 『国立民族学博物館研究報告』 26(4), 2002年, 533-573ページ。
- 中川敬一郎 『比較経営史序説』 東京大学出版会, 1981年。
- 中村健吾編著 『古典から読み解く社会思想史』 ミネルヴァ書房, 2009年。
- 橋本和也 『キリスト教と植民地経験—フィジーにおける多元的世界観』 人文書院, 1996年。
- 宮崎広和 「19世紀フィジーにおける首長と土地処分権」 『民族学研究』 57(2), 1992年, 197-221ページ。
- 宮崎広和 「オセアニア歴史人類学研究の最前線—サーリンズとトーマスの論争を中心として—」 『社会人類学年報』 (14), 1994年, 193-208ページ。
- 宮島喬 『文化的再生産の社会学』 藤原書店, 1994年。

Fijians in Flux
—Cultural Context of Practices Appearing in Reciprocal Organization,
and Quest for Modern Legitimacy—

TAKAHASHI Ryo

Abstract

This article utilizes a new framework of economic anthropology posited in the author's previous article to analyze actual cases. The modernization of developing countries can be understood as a process in which people in such countries are acquiring the "capitalistic habitus." The author conducted his fieldwork in two villages in Fiji. In their traditional social life, especially their reciprocal organization, several kinds of "deviating practices" caused by the expansion of the market system were seen. While some people can acclimatize to the changing social circumstances well, others can't. Through the interaction of their practices appearing in the field, a new "legitimacy" is being reproduced.